中学校理科におけるユニバーサルデザインの視点からの授業改善

田中　剛紀（子ども支援探究コース）

【探究実習のテーマと設定の理由】

平成 24 年度文部科学省調査によると，公立小・中学校の児童生徒のうち，発達障害（LD，ADHD，高機能自閉症等）の兆候のある児童生徒が通常学級に 6.5%の在籍率となっている。このうち，学習面で著しい困難を示し，学習障害に相当する児童生徒は 4.5%,「行動面で著しい困難を示し，注意欠陥多動性障害に相当する児童生徒は 3.6%，学習面と行動面でともに著しい困難を示す児童生徒は 1.6%存在する。また，平成 24 年 7 月の中央教育審議会初等中等教育分科会報告によると「共生社会の形成に向けて，障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育の理念が重要であり，その構築のため，特別支援教育を着実に進めていく必要がある」という方向性により,「合理的配慮」および「基礎的環境整備」の充実，学校間や関係機関との連携，教職員の専門性の向上等が示された。さらに，平成 28 年 4 月の障害者差別解消法の施行によって，公立の学校を含む行政機関等において，合理的配慮の提供をすることが法的義務となった。近年は，通常学級における多様な教育的ニーズの高まりからすべての児童生徒に対して等しく学びの機会を提供する「授業のユニバーサルデザイン」の視点からの授業改善が求められることから，このようなテーマ設定とした。

【探究実習の研究目標】

① 実習校の当該学年及び当該学級の生徒の実態把握

② 授業のユニバーサルデザイン及び学びのユニバーサルデザインに関する調査

【探究実習の概要】

A 中学校における 20 日間（9 月 1 日～2 月 16 日の毎週火曜日）の基盤実習では，第 3 学年の相談室登校の生徒，1，2 年生の知的特別支援学級の生徒を対象に授業実践を行った。実習前半では，第 3 学年の全学級の理科の授業観察及び T2 として机間巡視を実施した。また，この他にも体育大会や文化発表会・合唱コンクールでは，私も練習から参加し，生徒の活動補助や支援を行った。実習初期は授業観察が主で，生徒の様子や現場の先生方の実践の工夫を学ばせていただいた。

実習後半では，第 3 学年だけでなく第 1・2 学年の理科の授業観察及び T2 としての机間巡視に加えて，相談室や特別支援学級で授業実践をさせていただいた。授業後の生徒の感想や授業時の反応，メンターの先生によるフィードバックから成果及び来年度に向けた，授業実践の課題を明らかにすることができた。特に，実習の後半では，定期試験のテスト監督（通常学級・相談室）や自習監督など，貴重な経験をさせていただいた。また，授業はもちろん，休み時間，給食や掃除，朝の会・帰りの会，昼休み，放課後の専門委員会の話し合い活動・合唱練習にも参加させていただいた。

【探究実習の成果と課題】

今回の基盤実習の成果としては、3 点ある。

第一に，生徒の実態把握である。授業中の取り組みの様子はもちろんのこと，給食の時間，休み時間や昼休みなど,授業以外の生徒の見せる様々な側面を多面的･多角的に捉えることができたと思う。

また，個別に関わる機会のあった生徒の個別の指導計画を見せてもらったことで，アセスメントによるよりきめ細かな生徒の実態把握や生徒の特性のこと，本人が具体的にどのようなことに対して困難さを抱えているのかを知ることができた。これらの情報は、今後の指導・支援に生かす上で必須であると考えた。また，絶えずその生徒の状況に応じて見直しや更新を行い，授業改善や指導・支援の充実にとって必要不可欠であろう。さらには，メンターの先生の学級の Q-U を見せていただき，より生徒理解が深まり，今後の実践に向けて課題を明らかにすることができた。

第二に，現場の先生方の授業を学年や学級を問わず，幅広く見せていただいたことである。A 中学校では、3 年前から理科における「学び合い」の活動を推進されており，全校をあげて主体的・対話的で深い学びの実現に向けて注力していた。特に多く入らせていただいた第 3 学年では，導入の段階で生徒の興味関心を引き出し，好奇心をくすぐるような発問の工夫や学習課題の設定，そして，学び合いにより，生徒同士で教え合い，全員が高まりあうような授業づくりを展開し，随所にユニバーサルデザイン的な視点が数多く盛り込まれており，自身の研究において大変参考になった。

第三に，相談室及び特別支援学級で授業実践をさせていただいたことである。実際に授業を実施してみて，ユニバーサルデザインの理念や理論が分かっていても，実践となると生徒の実態に則した形で柔軟に工夫をしていかなければならないと考えた。授業実践をすることによって，これまで見えていなかった生徒の実態把握につながり，次年度の実践に向けて準備をする良いきっかけとなった。また, 自分の中で特に大切にしたいと考える授業のユニバーサルデザインの 3 つの視点(視覚化, 共有化, 焦点化)を実際の授業にどう盛り込んでいけば良いか，具体的な選択肢を考えるようになった。このことに関しても，今回の実習における成果の一つであると考える。

今回の基盤実習の課題としては，2 点ある。

第一に，来年度の実践に向けた授業準備である。入らせていただく学年及び単元が未定ではあるものの，年間指導計画に基づいて担当する可能性がある単元について想定して，指導案やワークシートなど，これまでの実践の振り返り・反省を生かし，自分なりの工夫を検討していきたい。

第二に，個に対する指導・支援の工夫である。近年，通常学級に在籍する生徒の個別の教育的ニーズは多様化している。そこで，すべての生徒にとって学びやすい授業づくりの工夫として学習環境の整備や教材・教具の工夫などを今後詰めて検討していく必要があると考える。また，相談室や特別支援学級はいずれも少人数クラスであり，生徒同士の人間関係も良好であった。しかしながら，来年度の実習で予定しているのは通常学級での授業である。授業形態（個人，ペア，グループ）や 1 時間の授業の流れ，発問の工夫，板書の工夫，ワークシートの工夫，ICT 機器の適切な活用など，よりよい授業づくりに向けて絶えず試行錯誤していきたい。

【引用文献】

・文部科学省（2012）「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」（調査結果）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/__icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf
（2021 年 1 月 28 日閲覧）
・中央教育審議会初等中等教育分科会報告（2012）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/__icsFiles/afieldfile/2012/07/24/1323733_8.pdf （2021 年 1 月 28 日閲覧）